

第3章 | 総括

佐倉 武 (社会福祉法人グロー (GLOW) 法人本部企画事業部 ケアサービス推進課)

私は2019年4月より現在の部署に配属となりました。それ以前は、障害福祉の現場で主に在宅で生活される知的障害の人の生活支援を10年以上してきました。そこでたくさんの方との出会い、同じ障害でも一人一人に個性があり、身体に合わせた介助方法や、コミュニケーションの仕方などそれぞれ違うことを学びました。

そして、現在の部署に配属になり、障害のある方のアクセシビリティ (社会参加のしやすさ) について考え、実践することになりました。鑑賞会の企画を通じて、支援者や支援者からお話を伺う中で、福祉制度のはざまに置かれている人たちや、その特性への理解が進んでいないことから福祉サービスが届きにくい状況にある人も少なくない現状に直面しました。しがらみのある者友の会の支援者からは誰とも出会っていない、ひきこもり状態にある盲ろうの方が滋賀県にはまだまだいらっしゃることを伺いました。また、高次脳機能障害の方の支援者からは、高次脳機能障害になった方の退院後の受け皿が滋賀県にはまだまだ足りないことも伺いました。福祉サービスがあっても使えるサービスの存在を知らない人や、担い手が少ないことからサービスを利用できない人もいます。

今回の研究では芸術鑑賞会に足を運んでいただくことをきっかけに困りごとやニーズを探りました。私はこれまで培ってきた福祉的な観点からどのような配慮や工夫があれば楽しんでいただけるかを考えました。当事者や支援者から直接お話を伺うことで、わかりやすく伝える方法や移動面や階段や段差などの環境面、音や光などの刺激が及ぼす影響についても考えました。

昨今は合理的配慮や情報保障の進展、テクノロジーの進歩から様々なサービスや仕組みができました。しかし、どれだけ仕組みや環境が整っていてもそのことを知らないという意味がありません。機械ではなく、直接人を介してしか情報を得られない人もいます。また、コミュニケーション方法も音声、手話、点字、文字、絵、写真など人によってそれぞれ違います。まずは情報を知ってもらうことが根底にあり、その情報を届けたい人に合わせた方法で伝えることが重要ではないかと感じました。そして、次にその場が安心して過ごせる環境であり、障害について理解のある人がいる。そこではどんな人でも自由に情報を得ることができる。それらが揃ってアクセシビリティの向上につながるのではと考えます。引き続きNO-MAをモデルとして、他の場面にも広めていけるよう実践し、検証していきたいと思えます。

石田 瞳（社会福祉法人グロー（GLOW）法人本部企画事業部 ケアサービス推進課）

今年度の地域ケアサービス推進事業では、芸術をきっかけに、障害のある人、特に制度のはざまにある人たちの生活ニーズに着目し、様々な場面へのアクセシビリティの向上を図る支援のあり方について研究を行いました。

NO-MAの企画展を会場に、当事者や支援者と連携し、「高次脳機能障害」、「盲ろう」、「発達障害、知的障害」の方々とともに楽しむ芸術鑑賞会を実施しました。鑑賞会では、障害特性に配慮した様々な工夫を取り入れたことに加え、交流や共感の場が生まれ、また、そのような場を求める声が当事者、支援者、一般参加者から多く寄せられました。結果として、鑑賞会の場には、「カルチュラル・デモクラシー」があったということが示唆されたとも言えます。カルチュラル・デモクラシーとは、すべての人が文化を作る、また鑑賞する実質的な選択の自由を持つ状況、つまり、誰もがそれぞれの方法で芸術を楽しむことができることを指します。

本研究を通して障害のある人のアクセシビリティの拡充とは何かを考えたとき、それは、誰もがそれぞれの方法で社会参加できる状況を実現させることであり、そのために必要な関係性を発展させていくことだと考察できます。単に必要な支援を一方向的に提供するのではなく、カルチュラル・デモクラシーに見られるように、誰もが参画者となり得る、互いの権利を認め合う関係性を築いていくことが求められているように思います。そのような関係性を育むことにより、当事者の目線から社会の「基準」を変えていくことがアクセシビリティの向上を図るうえで重要なのではないのでしょうか。芸術をともに楽しむことで導き出される支援のあり方をもとに、今後も当事者や支援者と互恵的な関係性を継続的に築き上げていき、誰一人取り残さない共生社会づくりに向けて、アクセシビリティの拡充に取り組んでいきたいと考えます。